

黒龍江省・吉林省における 契丹（遼）・金時代の遺跡の現状と調査

— 遼・金時代史研究の新しい潮流をめぐって —

森 部 豊

A Report on Relics of the Liao and Jin dynasties

MORIBE Yutaka

This paper reports on a survey conducted in China in September 2017 of archaeological sites from the Liao and Jin dynasties. The survey points were: Shangjing 上京 (Upper Capital) city of the Jin 金 dynasty in Acheng District, Harbin City, Heilongjiang Provincial, Shangjing (Upper Capital) city Museum, Tom of Tai-zu 太祖 of the Jin Dynasty, The imperial city of Shangjing (Upper Capital) city of the Jin dynasty, Xiaochengzi 小城子 Ruins, Architectural Shejitan 社稷壇, Architectural Tiantan 天壇 Ruins, Architectural Yagou 堽溝 Ruins, Architectural Banlacheng 半拉城 Ruins, Architectural Liuxiudun 劉秀屯 Ruins. Moreover, in Jilin Provincial, I visited the Architectural Tahucheng 塔虎城 Ruins, Architectural Foundation Spring Nabo in Qian'an, Chengsijiazi 城四家子 Ruins, Yueliangbao 月亮泡 Ruins, Pagoda of Liao Dynasty in Nong'an, Tom of Wanyan Loushi 完顏婁室 in Changchun.

キーワード：金上京遺址 (Shangjing (Upper Capital) city of the Jin dynasty)、金・天壇遺址 (the Architectural Tiantan Ruins of the Jin dynasty)、塔虎城遺址 (the Architectural Tahucheng Ruins)、乾安・遼春捺鉢遺跡 (the Architectural Foundation Spring Nabo in Qian'an)、城四家子故城 (the Architectural Chengsijiazi Ruins)

はじめに

2017年9月2日から9月9日まで、筆者は契丹史の専門家である古松崇志（京都大学）を中心とする調査団に加わり、武田和哉（契丹史、大谷大学）、藤原崇人（契丹史、関西大学）、毛利英介（宋・遼関係史、関西大学）、齊藤茂雄（突厥史、早稲田大学）とともに、黒竜江省と吉林省にある契丹（遼）および金代の遺跡、文物の調査を行い、またそれらの遺跡や各地の博物館において、現地の専門家から貴重な情報を得ることができた。本稿は、この調査に関する報告を行い、契丹（遼）・金時代史に関心のある人および広く東アジアの歴史に興味を持つ人にこの方面の研究状況を伝え、また今後の当該時代史研究の展望を述べようとするものである。

1 調査スケジュール

8月31日（木）北京空港着。9月1日（金）北京で調査のための準備を行う。

9月2日（土）午前のフライトで北京から黒竜江省ハルピンへ移動。午後3時20分、日本からダイレクトでやってきた調査本隊とハルピン空港で合流。その後、市内へ移動し龍門大廈（旧大和旅館）へ投宿。

9月3日（日）ハルピン市内の黒竜江省博物館において同省内で発見された歴史文物の調査を行い、あわせて遼金代に関する資料収集を行った。その後、阿城区へ車で移動し、昼食の後、金上京博物館にて金上京および金史に関する資料収集。隣接する金太祖陵を参拝。車で金上京会寧府の皇城遺址の発掘現場へ移動し、黒竜江省文物考古研究所スタッフから2017年度の発掘状況を見学し説明を受ける。ついで、皇城の午門および宮殿遺址を調査する。黒竜江省文物考古研究所スタッフの案内で小城子遺址（＝皇城寨遺址）へ赴き景観調査を行った。ハルピン泊。

9月4日（月）この日は朝から阿城区へ移動し、金上京の遺跡群の調査を行う。社稷壇遺址、祭天壇遺址を調査し昼食。阿城区から東南方向にある亜溝石刻へ行く途中、半拉城遺址と劉秀屯遺址の景観調査。最後に山岳地にある亜溝石刻の調査を行う。黒竜江省での調査を終了し、吉林省へ向かう。途中、後発の毛利英介とハルピン空港で合流した後、吉林省松原市へ移動。松原天達名都大酒店に宿泊。

9月5日（火）松原市内の前郭爾羅斯博物館において遼金史に関する資料収集を行う。その後、松原市の西北に位置する塔虎城遺址を調査。昼食後、乾安市へ移動し、乾安文化中心にて、遼代の春捺鉢に関する資料収集を行う。ここのスタッフの案内で遼金時代の春捺鉢遺址を調査する。この後、白城へ移動し、白城鶴翔大酒店に宿泊。

9月6日（水）まず白城市博物館にて資料収集し、その後、博物館館長自らの案内で城四家

子故城を訪れ景観調査を行う。双塔を見学後、大安市へ移動する。遼代墓が発見された月亮泡沿岸遺跡に行くが、案内人がいないため、遺跡の具体的な地点には到達できず。長春へ移動。途中、農安にある遼塔を調査する。長春に到着。春誼賓館（旧大和旅館）に宿泊。

9月7日（木）長春から吉林日帰り調査を行う。まず吉林市博物館へ行く。その後、昼食を食べてから吉林明清船廠歴史陳列で明代の碑刻を調査し、烏拉古城へ赴き、調査する。長春泊。

9月8日（金）午前中に吉林省博物院と東北師範大学の東北民族民俗博物館において、資料収集を行う。昼食をはさんで吉林大学キャンパス内にある考古与芸術博物館において、資料収集を行う。その後、長春市の東にある完顔婁室墓と墓碑の調査を行う。夜は東北師範大学の教授と情報収集と意見交換を行う。長春泊。

9月9日（土）長春から北京へ移動。10日（日）首都博物館を見学し、資料収集を行う。11日（月）帰国。

2 金上京遺跡群

9月3日と4日にかけて、黒竜江省ハルピン市阿城区に点在する金の上京会寧府の遺跡群およびその関連施設を訪れた（図1）。

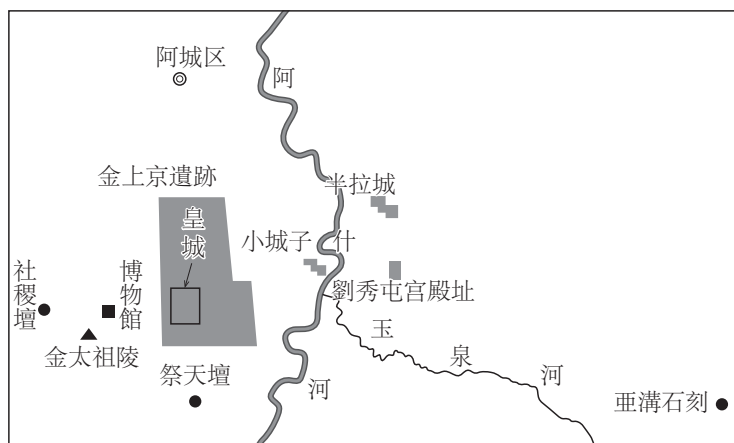


図1 金上京遺跡群

【金上京博物館】

金上京遺跡の西側に位置する。駐車場には完顔阿骨打の像がある。博物館のメイン展示の建物はL字型。女真族の興起、金上京の輝き、金代の人物などをテーマとし、パネル説明と写真

で説明し、あわせて上京出土の文物も展示している。ただ、2017年現在の他の博物館に比べ、



写真1 金上京博物館



写真2 金上京博物館石林



写真3 金代石刻

館内照明が薄暗い感じで、展示方法も、もう一つ工夫が欲しい。屋外には石刻文物の陳列コーナーがあり、金代のレリーフ、石柱礎、石棺などが展示してある（写真1，2，3）。

【金太祖陵】

金朝初代皇帝の完顔阿骨打の陵墓。金上京博物館に隣接し、徒歩でも行くことができる（入場料は別払い）。完顔阿骨打は1123年の対遼征伐戦の途中で病没し、この地に埋葬された。現在は、墳丘とその北側に新たに建造された寧神殿がある（写真4，5）。寧神殿の地下には「地宮」があるが、現代に新たに想像して建造されたもの。金太祖陵そのものは、太宗の天會十三年（1133）年に胡凱山に埋葬され、貞元三（1155）年には北京西郊の大房山へ遷陵されている。

ちなみに1936年にこの地の金上京遺跡や小城子遺跡を調査した園田は、太祖陵について言及していない。彼が作成した当該地区の地図には、現在の金太祖陵があると思われる地点に点将



写真4 金太祖陵



写真5 金太祖陵寧神殿

台の名が見える（園田 1942）。

【金上京皇城遺址】

金の上京会寧府は、北城と南城からなる城郭都市である（図2）。2017年現在、南北城の城壁は良好な状態で残っている。1964年の実測によれば、北城は南北1828m、東西1553mあり、また南城は南北1523m、東西2148mという。南北両城に9つの城門があり、そのうち7つに甕城がある。

皇城遺跡は、南城內にある。皇城を囲む城壁の保存状況は良くなく、東西城壁は道路となっており、北城壁は住宅になっている。そのため、ほとんど目視では確認できない。その中で皇城正南門の午門は比較的残っている（写真6）。門闕は明瞭で、高さ7mほどの門闕台が2基ある。そのあいだをくぐると、昔

の皇城エリアに入ることとなる。皇城内は草が生い茂る。皇城内にはかつての宮殿遺址があり、南北の中心軸上に5つ宮殿遺跡がある。第一殿址は乾元殿（皇極殿）の殿門遺址の可能性があり。第二殿址は“土形”で、乾元殿（皇極殿）の遺址とされている。第三、四、五殿址は一組の宮殿群と考えられている（写真7）。

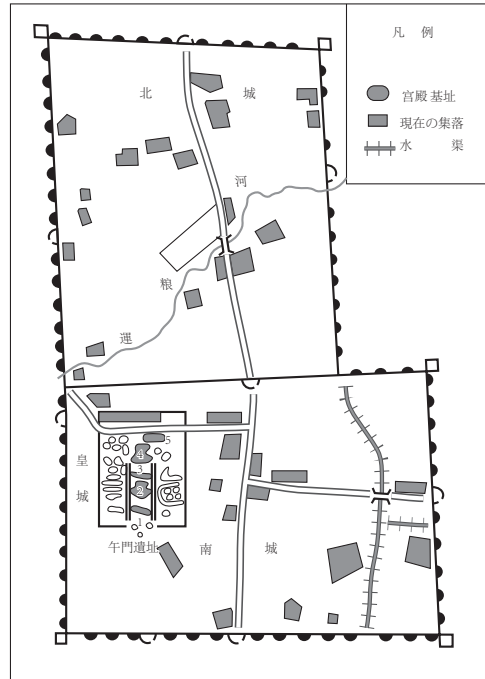


図2 金上京遺跡平面図



写真6 金上京皇城午門（皇城内から撮影）



写真7 金上京皇城宮殿遺址

2015年、黒竜江省文物考古研究所により、これらの宮殿遺跡とは別の場所の発掘が行われた。具体的には皇城宮殿群遺跡の西部地区が学術調査によって発掘された。この結果、庭園を持つ建築の遺構が確認された（黒竜江省文物考古研究所 2017）。また、2017年9月現在、皇城東部の発掘が進められており、こちらでの成果の公表が待たれる。

【小城子（皇帝寨）遺址】

小城子遺址は、金上京会寧府遺址から東へ2キロほど行ったところの阿什河郷双城村にある（図1）。2014年に全国重点文物保護単位となった。『中国文物地図集・黒竜江巻』では、この遺跡が金太祖の完顔阿骨打の「御寨（宮城）」であり、歴史書に言うところの「皇帝寨」とであると説明する。太宗の時、都を会寧府に移した後は、皇室が春に魚釣りに行くための行宮として利用されるようになる。また、後に、「左祖右廟」の制により、ここには太祖や太宗を祭る廟が建てられたともいう。一方、この地を調査した園田によれば、皇城寨という認識はなく、『金史』に見える「雲錦亭」もしくは「臨漪亭」ではないかと推測している。園田は、宮殿遺址と思われる地点で簡単な発掘を行っており、磚を敷き詰めた床を見つけている。また別の宮殿遺址付近では緑釉瓦が散乱していたという。これが、上京会寧府の宮殿遺址のものと同質のものと認識した園田は、ここを離宮と推定した。またこの遺跡の東北一帯は阿什河に連なっており、金の皇帝が涼を取るのにも適していたことを指摘する（園田 1942）。

『中国文物地図集・黒竜江省』の解説や金上京博物館の展示写真パネルなどでは、この遺跡の東城壁に門があり、門闕の遺構がきれいに残っているようであるが、2017年9月の調査時には、遺跡の現状は、東城壁一体には民家（農家か？）が立ち並び、アプローチするルートが見つからず、上記門闕は確認できなかった。我々は、北・西・南の城壁遺址を確認。ただし、

草が生い茂り、版築の跡などの確認はできなかった。残る城壁の高さも1mから2mほどであった（写真8）。



写真8 小城子遺址 北城壁

【社稷壇】

「社稷壇」遺址は、会寧府遺址の西、およそ2km離れた双豊郷勝祥村管家屯に位置する。上京会寧府を中心とするこの一帯が、全国重点文物保护单位に指定されている。この遺跡は、中央に基壇があり、四方は城壁に囲まれ、それぞれに城門が設けられているという。瓦当や板瓦、筒瓦、瑠璃瓦などが収集されているようである。遺跡の現況は、畑の中に遺跡があり、2017年9月4日の調査時には、トウモロコシが植えられており、景観など確認できなかった。

【祭天壇】

この遺跡は、女真族が「祭天壇」した場所と、中国の学界では認識されている。遺址は、会寧府遺跡の南、およそ3.5km離れた双豊郷新民村に位置する。饅頭型墳丘で、頂上部分は平らである。高さは14m、周囲は250mである。ちなみに園田はこの遺跡を認識しておらず、彼の作成する地図には、斬将台の名が見え（園田1942）、これが現在の祭天壇遺址に相当しそうである。



写真9 祭天壇遺址

遺跡の保存状態は良好である。周辺は水田であり、我々が訪れた2017年9月4日は、曇天であったが、収穫前の稲穂が実る水田のなかに屹立する墳丘の姿は、日本の古墳のようにも見えた（写真9、10）。



写真10 祭天壇遺址

【半拉城子遺址】

金上京会寧府遺址の東に位置する阿城区市街地で昼食を摂ったのち、亜溝遺跡へ行く途中の幹線道路沿いにある（阿什河郷半拉城子村。図1）。1961年に阿城区文物管理所が調査を行っている。西側の城壁が河水で浸食され、残っていないことが、この遺跡の名前の由来という。東、北、南城壁は残っており、また西城墙南の角楼も1961年時には高さ10mほど残存していたという。城内からは金銀器、鉄製品、銅製品、瓦や磚などが収集されているようである。この遺跡は、女真族の最初期の城寨遺跡の一つで、出土文物や会寧府との位置関係から、金の宗室もしくは貴族層の居住地なのではないかと推測されている。2017年9月の調査においては、幹線道路沿線から眺望するだけにとどまった。遺跡全体にはトウモロコシが植えられ、遺構景観は確認できなかった（写真11）。



写真11 半拉城子遺址

【劉秀屯遺址】

阿城区から亜溝石刻遺跡へ行く途中、亜溝鎮長勝村東にある（図1）。周辺には民家などなく、鉄条網で囲まれ保護されている。草木で覆われ、景観は全く確認できない（写真12）。発掘



写真12 劉秀屯遺址

はすでに行われているとのことであるが、詳細は不明。主殿、過廊、後殿、正門および回廊から構成される。主殿は幅9間、奥行き5間。主殿と後殿は過廊で結ばれ、「工」字形であるという。

【亜溝石刻】

金代初期の女真族の摩崖石刻遺址で、上京会寧府から東南に15kmほど離れた地点、亜溝鎮の東5kmほどの石人山南麓にある(図1)。1988年に全国重点文物保护单位に指定されている。この一帯は、女真族の完顔部が居住していたエリアと思われる。

山麓に駐車し、石刻されている崖まで歩いていく。2017年9月現在、そのための登山歩道が整備されている。この登山道の途中に摩崖石刻がある。現在、コンクリートの建物で保護されており、柵越しに見学できる。石刻は男女の像が彫られている(写真13, 14, 15)。



写真13 亜溝石刻

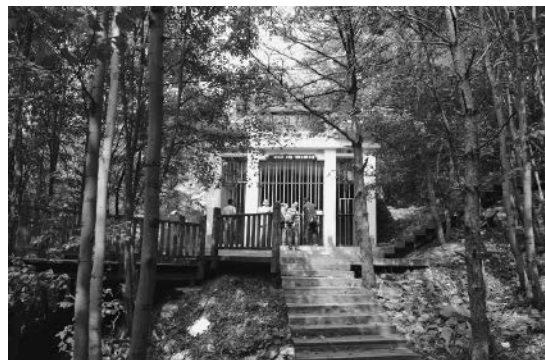


写真14 亜溝石刻



写真15 亜溝石刻

この摩崖石刻がある亜溝一体の山岳地帯からは金代貴族墓がいくつか発見されているようである。ここには、完顔阿骨打の母の墓がある可能性もあるとの説明を受けた。

3 吉林省遼金遺跡

【塔虎城】

塔虎城遺跡は、吉林省前郭爾羅斯蒙古自治県八郎郷北上台子村に位置する。前郭爾羅斯蒙古自治県城（松原市）から西北へ車で約1時間。東西南北の城壁が残る。幹線道路が遺跡の南北を貫いて通っており、南門付近と北門付近が破壊されている。その断面から版築を確認できる。1950年代から80年代に何回かにわたって実測調査が行われている。それらによれば、東城壁は1324m、西城壁は1298m、南城壁は1278m、北城壁は1323mである。城壁の高さは5mから6.5mの残存状況という。東西南北に城門があり、また甕城がある。城壁には馬面が設けられている（図3）。2002年に全国重点文物保護単位となっている。

2017年9月5日、まず南門の景観調査を行った（写真16）。次いで車で北門まで行き、そこでUターンして城内へ戻り、途中、農道へ入って西門へ向かった。ここから西城壁、西南角楼、南城壁、南門へと歩いて景観調査を行った（写真17）。西城門とその外の甕城を確認。西城壁そのものも良好に保存されている。城壁外には濠がある。城内は開墾され、一面畑になっている

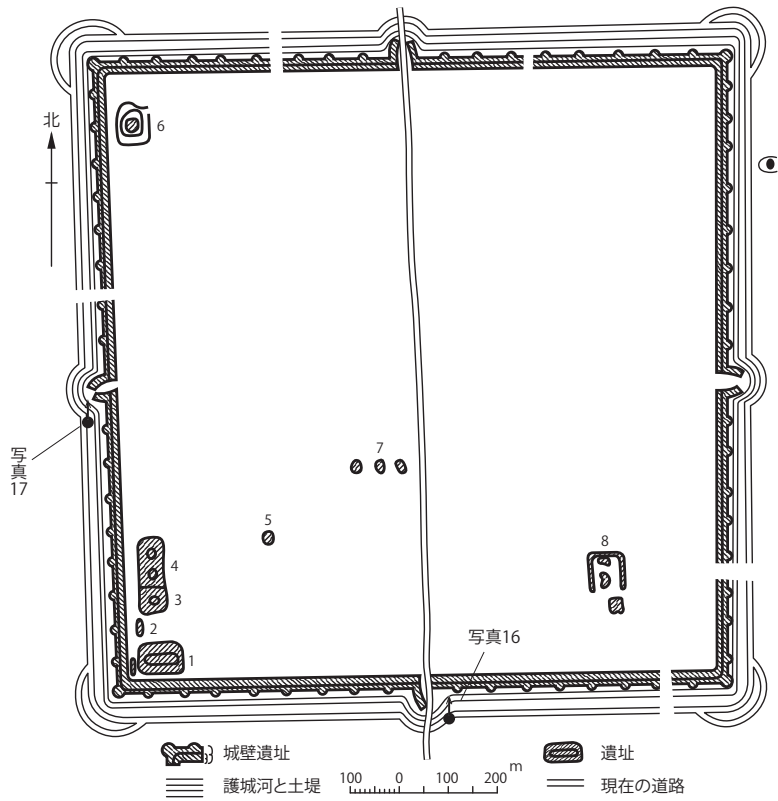


図3 塔虎城平面図 (邱2015をもとに作成)



写真16 塔虎城遺址 (南門)



写真17 塔虎城遺址（西門と甕城）

が、民家などは存在しない。1975年に整地されたため、城内にあった建築遺址などは、西北角城内にある、俗称「金鑿殿」以外、残っていない。前郭爾羅斯博物館の展示によれば、家屋や円形の建築遺址が発掘されているようである。

塔虎城が歴史上のどの城郭都市に相当するのか、という問題に対し、次のような見解が提出されている。①遼の長春州，金の泰州（新）（曹廷傑，李健才など）②遼の出河店，金の肇州（張柏忠）。彭善国 2015は、先行研究を博搜し、また文献史料と考古資料をあわせて分析し、②説を支持している。

【乾安県春捺鉢遺址】

捺鉢とは、「秋と冬は寒さから逃げ、春と夏は暑さを避け、水草のあるところをによって狩りや魚をとらえ、毎年、これを常制とした。四季それぞれの行在の場所を捺鉢という」（『遼史』卷32「營衛志・中」）。吉林省乾安県で遼の春捺鉢の遺跡が発見されたのは、2009年の第三次文物普查の時であった（図4，5）。春捺鉢は、魚を捕らえることや白鳥など渡り鳥を捕獲することが行われたが、その場所も、後に「鴨子河澗」に固定されたようである。『遼史』によれば、「鴨子河澗」は「東西二十里，南北三十里」の広さがあり、長春州から東北方向に35里ほど離れているという。現在、遼の長春城は「城四家子故城」に比定される見解が強い（下記参照）。

2009年の発見では、春捺鉢の遺跡群は、乾安県城の東北に位置する查干湖の西南岸地帯（地字区，蔵字区，騰字区）と乾安県城の西に位置する花敖泡の東南岸（後鳴字区）とに散在することが明らかになった。これを踏まえ、2013年と2014年に後鳴字区において発掘が行われた。発掘地点は、昔の花敖泡の湖底にあたり、一面の平地ではなく凸凹している地形である。それらの盛り上がった土台が調査されたが、それらの一部分は人工的に造営されたものであること

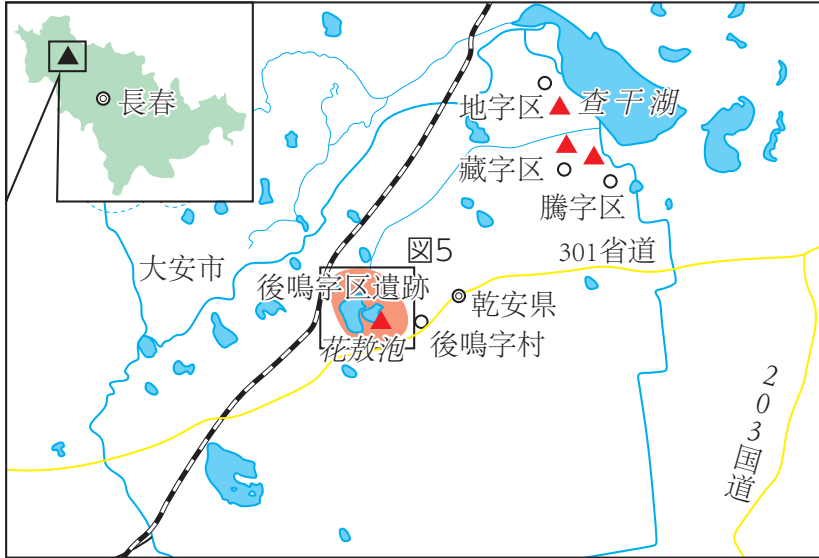


図4 吉林省内春捺鉢遺跡分布図 (▲印が遺跡) (吉林大学2017をもとに作成)

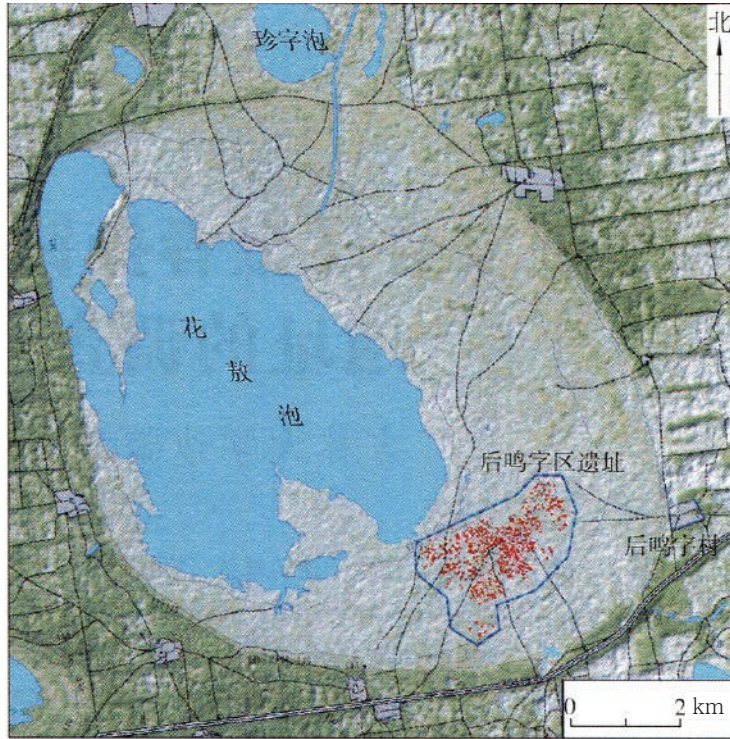


図5 後鳴字区遺跡分布図 (吉林大学2017より転載)

がわかった。また、土台には建築の遺構は認められず、火を用いた痕跡だけ見つかったことか



写真18 乾安県春捺鉢遺址



写真19 乾安県春捺鉢遺址

ら、移動式のテントを張った場所と考えられている。また、一か所、土壁に囲まれた地点があり、そこでは建築の遺構が確認できた。ここからは、仏像の頭部、陶器製の鳥像（鳳凰）、瓦当などが出土した。発掘隊はここを宗教関連施設ではないかと推測している（吉林大学辺疆考古研究中心 2017）。

9月5日、乾安県文化中心のスタッフの案内により、後鳴字区の遺跡の景観調査を行った。あいにくの雨で、車で花敖泡の沿岸近くまで進入することができず、徒歩による限られた範囲での考察となった（写真18, 19）。

【城四家子城】

吉林省白城市洮北区徳順蒙古族郷内にある城郭都市遺跡。2006年に全国重点文物保護單位に

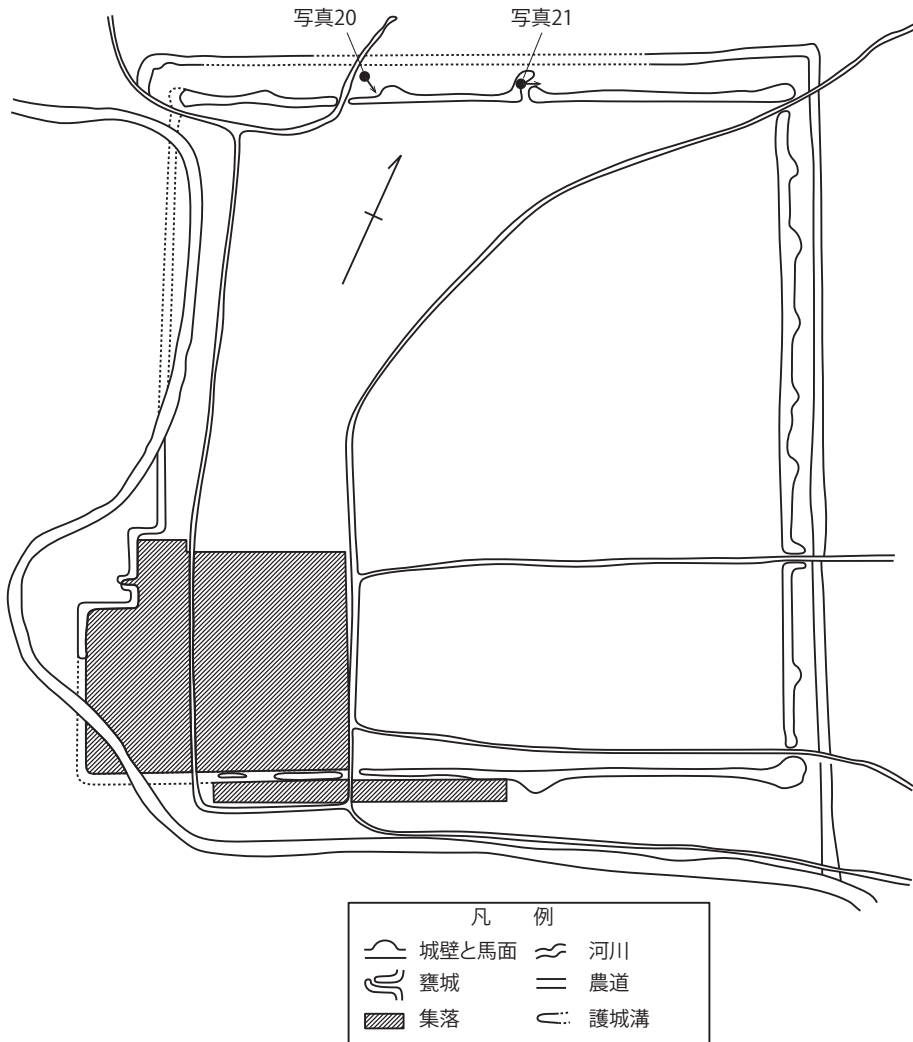


図6 城四家子城平面図（邱2015をもとに作成）

指定された。この都市は洮兒河の流れに沿って建造されたため、中心軸が西へ傾いている。東西南北の城壁には城門があり、また半月形の甕城が設けられている。西城壁と南城壁は洮兒河の河道にあわせてあり、方形ではない。また、城門と甕城も河道に合わせて設置されている。現在、西城壁は洮兒河の流れで浸食されており、483mしか残っていない。しかし、他の三面の保存は良好で、東城壁は1340m、南城壁は1175m、北城壁は1135mある。城壁の高さはおおよそ5mである。ところどころに馬面が設けられている（図6）。

2017年9月6日に我々が調査した時点では、城壁はフェンスで囲まれ、保護されている状態

だった。我々は、白城市博物館館長の宋明雷氏の案内でフェンス内に入ることができ、北城壁を踏査した。城壁の残存状況は良好で北門および甕城を確認した（写真20, 21）。

城子家城については、ここが遼・金時代のどの城郭都市にあたるのか、塔虎城とともに論争がある。この問題に対して積極的発信をし続けているのが白城市博物館の宋徳輝氏であり、氏の見解によれば、城四家小故城は遼代の長春州で、金代の新泰州であるという（宋徳輝 2008）。

【月亮泡沿岸遺跡】

月亮泡は、吉林省大安市と鎮賚県にまたがり、洮兒河が嫩江に合流する地点にある。『遼史』巻17「聖宗本紀」に見える「魚兒灤」という説もある。いずれにせよ、ここも契丹皇帝の春捺鉢の一つであったことは確からしい。また、月亮泡では、遼代の墓が発見されている。しかし、今回の調査では具体的場所は確認できず、地形など景観調査にとどまった（写真22）。

【農安遼塔】

長春市北に位置する。かつて、この地に契丹（遼）の黄龍府が置かれたという。ただし、黄龍府は、10世紀前半にはじめて置かれた場所と11世紀の前半に置かれた場所とは異なっている。この11世紀の黄龍府の遺跡が、現在、残っているものであるが、保存状態はよくない（邱靖嘉 2015）。

我々が農安に到着したのは、日没直後で、城遺址の調査はできなかった。現在の市街地の真



写真20 城四家子故城



写真21 城四家子故城北城壁



写真22 月亮泡沿岸風景

ん中に遼代の塔が残っており（写真23）、この塔の調査のみ行った。

【完顔婁室墓と墓碑】

完顔婁室は金朝開国の功臣の一人。遼の天祚帝を山西の応州で捕らえたことで有名。金の太宗の天會八（1130）年十二月、遠征途上、甘肅の地でなくなった。墓地は長春市の東郊外の三道郷豊産村に位置する。もとは墓前に神道碑があったが、現在では失われている。神道碑の碑文は、羅福頤『満州金石志』補遺附外編に「大金故開府儀同三司左副元帥金源郡壯義王完顔公神道碑」と題して、全文が収められている（同書は、『石刻史料新編』23冊，台北・新文豊出版公司，1977所収）。

現況は、何も無い荒地で、復元された神道碑と石像がいくつか転がっている（写真24）。



写真23 農安遼塔



写真24 完顔婁室墓

おわりに

近年の日本において、契丹（遼）の研究を志す若手が少しずつ現れてきているが、金を専門に研究しようという者はほとんどいないのが実情である。本稿で紹介したように、金の上京会寧府の発掘も少しずつ始まり、また遼金の捺鉢に関する遺跡の発掘も始まっている。これらは、従来の文献史料の記述の不十分さを補い、あるいはその記述に具体的像をもって肉付けするものとなるだろう。また、今回紹介した遺跡の一部は、過去の不幸な時代において、日本人などによる調査も行われている。それらを再び見直す作業を行う必要もでてくることだろう。

【参考文献】

園田一亀『満洲国古蹟古物調査報告書（四）吉林・濱江両省に於ける金代の史蹟』（初版は満洲帝国民生

部, 1942年。国書刊行会, 1976年復刊)

吉林大学边疆考古研究中心「吉林乾安县遼金春捺鉢遺址群後鳴字区遺址的調査与発掘」(『考古』2017-6, 28-43頁)

邱 靖嘉「吉・黒二省遼金城址考察記」(『遼金歴史与考古』第4輯, 遼寧教育出版社, 2015年, 69-81頁)

黒竜江省文物考古研究所「哈爾濱市阿城区金上京皇城西部建築址 2015年発掘報告」(『考古』2017-6, 44-65頁)

宋 德輝「城四家子古城為遼代長春州金代新泰州」(『白城師範学院学报』22-2, 2008, pp. 24-28. 『北方文物』2009-2 に再掲載)

趙 永軍「金上京城址発現与研究」(『北方文物』2011-1, 37-41頁)

張 柏忠「金代泰州・肇州考」(『社会科学戦線』1987-4, 208-211頁)

彭 善国「吉林前郭塔虎城為金代肇州新証」(『社会科学戦線』2015-10, 122-129頁)

【付記】本稿は、JSPS 学術システム研究センター委託研究費「平成29年度学術研究動向調査等に関する研究」の助成を受けたものである。

